

使役交替と変化：「かえる」と「かわる」の意味構造

奥野浩子

0. はじめに

「使役交替 (causative alternation) とか「使役・起動交替 (causative-inchoative alternation) といわれる現象は、多くの言語学者の興味を引きつけてきたトピックの一つである。Jespersen (1927: *MEG*) は、使役交替に参加する動詞のクラスを「移動と変化のクラス」と特徴付けた (Levin and Rappaport Hovav 1995)。使役交替の中心的な意味クラスは「状態変化動詞」と「移動動詞」であることによる。

興味深いことに、日本語には「状態変化」も「移動」も表すことができる「かえる」と「かわる」という動詞がある¹。移動も「位置変化」とみれば、使役交替の意味クラスは「変化」を表す動詞である。まさに、その「変化」を表す最も基本的な動詞が「かえる」・「かわる」であろう。本稿の目的は、この二つの動詞の意味構造を明らかにし、どのような使役交替を示すのかを明らかにすることである。まず、次の例を考えてみよう。

- (1) a. 花子が部屋をかえる。
- b. 花子が部屋をかわる。
- c. 部屋がかわる。

(1a) は、「花子が部屋の模様替えなどをして、部屋内部の状態を変化させる」という部屋の状態変化の解釈と、「花子がある部屋から別の部屋に移る」という移動の解釈がある。(1b) は、状態変化の解釈はなく、移動の解釈しかもたない。(1c) は、状態変化の解釈と移動の解釈がある。状態変化の意味では、(1a) と (1c) が使役交替のペアをなすといえそうであるが、移動の意味で (1c) とペアになるのは、(1a) と (1b) のどちらであろうか。(1a) と (1c) が、移動の意味で使役交替のペアであるとすると、状態変化の意味での使役交替とは何か違いがあるのであろうか。もし、(1b) と (1c) が移動の使役交替であるとすると、自他同形の動詞ということになるが、この場合の使役交替はどのような仕組みによると考えられるだろうか。

この使役交替ペアの自動詞は、意味的には動作主の存在が前提とされる。たとえば「木が植わる」は、誰かが木を植えるという使役行為が前提とされ、「絵が掛かる」には、誰か動作主が絵を掛けることが前提となる。しかし、動作主は意味的に理解されるだけで、動作主を統語的に表示することはできない。動作主は、意味的に含意されるだけで、統語構造には一切反映させることはできない。「わざと」や「ていねいに」というような動作主指向の副詞や、「～するために」という目的節と共起することもできない。

- (7) a. *市の職員によって桜の木が公園に植わった。
b. *ボランティアの学生によって募金が集まった。
(8) a. *わざと、壁にグロテスクな絵が掛かっている。
b. *箱にていねいに品物が詰まっている。
c. *プライバシーを守るために、生垣が植わっている。 (影山 1996: 187)

また、反使役化の場合とは違って、動作主は意味的には存在するため「勝手に」との共起は許されないし、命令文も不適格になる。

- (9) a. *勝手に、箱に本が詰まった。
b. *勝手に、庭に木が植わった。
c. *ピカソの絵が勝手に壁に掛かった。 (影山 1996: 189)
(10) a. *木よ、植われ！
b. *絵よ、壁にうまく掛かれ！
c. *本よ、箱にきちきちに詰まるな！ (影山 1996: 190)

2. 状態変化の「かえる」と「かわる」

状態変化の「かえる かわる」は、形態からも意味からも、脱使役化が関わる使役交替である。自動詞「かわる」では、動作主は意味的に存在するが、統語的には抑制されていると考えられる。このことは、影山が用いたテストでも立証される。動作主の存在と矛盾するような表現とともに用いることはできない。

- (11) a. *職員によって部屋がかわった。
b. *勝手に、部屋がかわった。
c. *部屋よ、かわれ！
d. *気分転換のために、部屋がかわっている。
e. *わざと、部屋がかわっている。

一般的に、状態変化動詞のLCSでは、それぞれの動詞の結果状態が定項の形で指定されると仮定されている。たとえば、英語の他動詞 *break* のLCSは次のように表される。

(12) *break*: [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT <**BROKEN**>]]

結果状態が「こわれた (*broken*)」状態でなければ、*break* ではないということである。状態変化他動詞の「かえる」の結果状態を、かえられたあとの「かわった状態」と考えると、そのLCSは次のように表すことができる。

(13) かえる: [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-[かわった状態]]]

この構造に、動作主 *x* を統語的に抑制する脱使役化が適用されると、状態変化を表す自動詞「かわる」ができる。

3. 移動の「かえる」と「かわる」

今度は、「移動」を表す「かえる かわる」を考えてみよう。先に述べたように、(1a)(1b)(1c)はすべて、「移動」を表すことができる。(1c)は、形態からも「ガ格」主語の使用からも自動詞であることがわかる。使役交替は、ヲ格でマークされる他動詞文の目的語と、ガ格でマークされる自動詞文の主語が対応する。外見上は、(1a)の「かえる」も(1b)の「かわる」も、(1c)の自動詞「かわる」に対応している。問題は、「ヲ格」を含む(1a)と(1b)のどちらが、(1c)と使役交替のペアになる他動詞であるかである。

(1b)の「かわる」が他動詞であるとするれば、自他同形の動詞が用いられていることになる。よく知られている自他同形の「開く」の他動詞用法は、受動化が可能である。しかし、(1b)の「かわる」は(15c)に示すように受動化ができない。

- (14) a. 彼らは3人がかりでようやく重い鉄の扉を開いた。(他動詞)
b. 重い鉄の扉がようやく開いた。(自動詞)
c. 重い鉄の扉が彼らによってようやく開かれた。(受身形) (影山 2002: 124)
- (15) a. 花子が部屋をかわる。(=1b)
b. 部屋がかわる。(=1c) (自動詞)
c. *部屋が花子によってかわられた。(受身形)

影山(2002: 124)によれば、統語的な受身は、外項を付加詞に格下げする働きを持つから、受身化

できる他動詞は、外項をもつ他動詞である。したがって、(1b)の「かわる」は、(15c)に示すように非文であるから、外項をもつ他動詞ではないということになる。

これまで(1b)の「かわる」は、移動を表すという前提で議論してきたが、どのような移動が表されているかを考えてみよう。主語「花子」が、「ある部屋から別の部屋に」移動するのである。変化の主体は主語であり、ここで用いられている「かわる」は自動詞ということになる。では、ヲ格でマークされているのは何かというと、移動の経路であると思われる。

「移動」というのは、ある一点から動き始めて、ある道筋を通過して、他の一点に至るといった人やものの動きである。寺村(1982)や影山・由本(1997)は、こうした起点・経路・着点に注目して、移動動詞を分類している。両方とも、日本語の移動動詞は、起点、着点、経路のうちいずれか1つに重点をおいて表現するという観察が元になっている。影山・由本は、さらにアスペクトの点から、未完了(継続)相の経路指向動詞と、完了相の起点/着点指向動詞の二つに分類している。寺村(1982)は、日本語では起点も経路も「～を」でマークされるとしているが、起点の「～を」は「～から」と言い換えが対し、「～をかわる」では「～からかわる」は不可能であるから、この場合の「～を」は経路と考えられる。

ある場所や所属する場所から別の場所や所属に移動する時の経路が、「～を」でマークされていると考えると、場所や所属を表さない場合には、(17a)のように「～をかわる」とは言えないということが説明できる³。

(16) a. 太郎が{勤め先/ 席/ アパート}をかわる。

b. {勤め先/ 席/ アパート}がかわる。

(17) a. *友子が{話題/ 電話番号/ メールアドレス/ 行き先}をかわる。

b. {話題/ 電話番号/ メールアドレス/ 行き先}がかわる。

話題や電話番号などは、場所や所属とは解釈されないために、人間が意図的に場所・所属を移動することを表す「かわる」とは共起できない。

この「かわる」は、意図的な移動であるから、影山・由本(1997)にしたがってACTとMOVEという意味述語を用いて次のように表すことができる⁴。

(18) (部屋を)かわる : [x ACT] CAUSE [x MOVE [PATHFROM y₁ TO y₂]]

移動の経路<PATH>は、「～を通過して」ということであるが、その道筋全部を表すと起点から着点へという「～から～に」(FROM ~ TO ~)の形をとる。「部屋をかわる」では、「部屋₁から部屋₂に」という経路であり、「席をかわる」は「席₁から席₂に」というように、「～から」と「～に」の変項部分には、同一タイプの別トークンが入る。このような場合に、「ヲ格」の使用が許されると考え

ることができる。よく指摘されるように、日本語では経路が「ヲ格」でマークされるが、「ヲ格」は典型的に目的語をマークするものであるため、寺村(1982: 112)では、経路の「～ヲ」が一番動作の「対象」的性格があるという観察が、中右(1994: 338)でも、英語の例に関してではあるが、経路の目的語は全体的接触の含意があり、全体的影響を受けるという意味あい加わるため、経路の目的語を被動者とよんでもいいと述べられている。たとえば、「公園を散歩する」や「銀座を歩く」は、「公園で散歩する」や「銀座で歩く」とは違って、単なる行為の場所を表すのではなく、公園全体あるいは銀座全体に行為が及ぶといわれるが、「公園₁から公園₂へ」「銀座₁から銀座₂へ」という経路の内部構造を仮定することにより、「ヲ格」の出現が説明できる。

(1b)の「かえる」が自動詞であるとする、(1c)の自動詞「かわる」に対応する、移動の他動詞は(1a)の「かえる」ということになる。この移動は、どのようなLCSで表すことができるだろうか。状態変化の場合と同じように、移動の「かえる」も、他動詞をもとにした脱使役化による自動詞化であると思われる。脱使役化の操作がからむ使役交替では、自動詞用法においても、意味的には動作主が存在が前提とされるものであった。他動詞の「かえる」は、使役と移動の両方がLCSに含まれるはずである。いいかえると、「何かを移動させる」ということが捉えられなければならない。何が移動させられるのかを明らかにするために、移動を表す「かえる」の用法をくわしく見てみよう。場所・所属を「かえる」という場合に、次のような表現が可能である。

- (19) a. 花子が部屋を、1号室から2号室にかえた。
b. 花子が席を、A席からB席にかえた。
c. 花子がアパートを、A荘からB荘にかえた。
d. 花子が職場を、A社からB社にかえた。

「～を」に加えて、「～から～に」という経路の表現をとることができる。「～から～に」で表されるのは、「～を」の下位語であるといえる。1号室、2号室というのは「部屋」の下位語であり、A荘、B荘というのは「アパート」の下位語である。影山・由本(1997: 133)にも、日本語では、起点、経路、着点の全てを同時にカバーできる動詞は少数であるが存在するとして、次のような例があげられている。

- (20) a. 彼女は泳いで、英仏海峡をイギリスからフランスに渡った。
b. 夜行列車は東海道を京都から静岡に進んだ。

このような例でも、英仏海峡や東海道を経路と見ると、イギリスとフランス、京都と静岡は、それぞれ、その下位語と考えることができる。

さらに、(19)で「～を」でマークされているものは、主語の居場所であるので、主語が場所を所有しているという(一時的)所有関係と捉えることができる。(19a)の部屋は「花子の部屋」のほうであり、(19b)の席は「花子の席」のほうである。そこで、次のような使役移動の構造を仮定してみよう。

(21) [x ACT] CAUSE [y_x MOVE [PATHFROM y₁ TO y₂]]

意味述語 MOVE の主語 y に、ACT の主語 x の指標をふって所有関係を表している。この構造は「x が、x 自身が所有する y を移動させる」ということを表している。この構造に対して、脱使役化が適用されると次のようになる。

(22) [x ACT] CAUSE [y_x MOVE [PATHFROM y₁ TO y₂]]
 ↓ ↓
 ∅ 内項

動作主 x が抑制されても、内項 y に指標 x が付与されているので、誰かの所有する y であることが保証される。

次のように、主語と場所が所有関係にないと思われる場合もある。しかし、よく考えてみると、主語は場所に関して支配権を持っていることがわかる。

(23) a.(ホテルの)支配人が私の部屋を(マウンテンビューからオーシャンビューへ)かえた。
 b. 先生が私の席を(後ろの席から最前列の席へ)かえた。

ホテルで客の部屋をかえるとか、教室で生徒の席をかえることができるのは、ホテルや教室全体に対して、支配権が及ぶような立場にある者であると思われる。このような、場所に対する支配権も比喩的な意味で所有関係ということができるとと思われる。(23)の例で、目的語名詞句から属格を取り除くと、(23)と同じ意味のほかに、目的語名詞句が主語の所有であるという意味も得られる。

(24) a. 支配人が部屋をかえた。
 b. 先生が席をかえた。

(24a)では、支配人が「客の部屋」をかえたという解釈も、自らが「自分の部屋」を移動させたという解釈がある。(24b)でも、先生が「生徒の席」をかえたという解釈も、「自分の席」を移動させたという解釈も可能である。このようなことを意味構造に反映させたものが、x という指標つきの y

- (29) a. 校長先生がいる間、教頭先生が話題をかえた。
 b. 校長先生がいる間、話題がかわった。
 c. 数分で、教頭先生が話題をかえた。
 d. 数分で、話題がかわった。

そうすると、移動の「かえる かわる」は、継続相を表す MOVE のほかに、完了と結び付く意味を含んでいることになる。影山・由本(1997: 134)は、移動動詞を起点/着点指向と経路指向に区別して、両者はアスペクトが完了か未完了かという違いがあるだけでなく、統語的な差もあることを指摘している。起点を表す「～から」と着点を表す「～に」はペアで用いられることが多く、途中経路を表す「～を」は「～から～に」とは別に用いられると述べている。「～を」と「～から～に」は共起しないということになる。しかし、(19)で見たように、「かえる」は「～を」も「～から～に」も同時にとることができる。影山・由本の観察に基づくと、「かえる」は「～を」をとれる未完了の要素と「～から～に」をとれる完了の要素の両方を含んでいることになる。

(19)の「～を」と「～から～に」との共起や、(29)の継続時間と時間枠との共起は、「かわる」の LCS が、(27)のように経路の内部構造まで指定していることによると考えることができる。その内部構造は、起点と着点をとるように指定されていて、しかも、その起点と着点が内項の下位語になっていなければならないという指定がある。(27)の意味述語 MOVE が継続時間との共起を、経路の内部構造が起点・着点を指定していることが、時間枠との共起を可能にしていると考えられる。

5. おわりに

「状態をかえる」ことと「場所をかえる」ことが、判然としない場合もある。たとえば、「木の葉が色をかえる」場合は、「ある色から別の色に」かわるが、これは状態変化だろうか、移動だろうか。また、「顔色をかえる」場合はどうであろうか。同じ色の変化でも、一方は無生物の(ただし植物の)変化であり、一方は人間の変化である。しかし、どちらも意図的にできる変化ではない。寺村(1982: 117)では、「人口が3万から4万に増える」は状態変化で、「人が山村から都市に移動する」は移動であるとしている。この観察のもとにあるのは何であろうか。さらに、寺村では、状態変化と移動とは多くの点で共通しているとも述べられている。

本稿では「かえる かわる」の使役交替を脱使役化によると分析した。影山(1996: 188)によれば、英語には脱使役化が存在しないということである。そうであるとすれば、英語では日本語の「かえる かわる」はどのように表現されるのであろうか。また、「部屋をかわる」「席をかわる」のような移動の表現は韓国語にはないということである。日本語と韓国語は、構造がよく似ているが、この違いはどうとらえられるだろうか。

状態変化と場所移動がどのように認知されるのか、移動の「かえる かわる」が他の言語でどのように表現されるかは、今後の研究課題としたい。

注

- * 本稿は、日本語を学ぶ韓国人留学生、曹永宇くんが、日本語の「席をかわる」という表現について質問してきたことがきっかけになった。こうして、小論の形にまとめる契機をあたえてくれた曹永宇くんに感謝したい。
- 1 小学館『国語大辞典』(1988)では、「かわる」に「代わる・替わる・変わる・渝る」の漢字があげられており、「代わる・替わる」と「変わる・渝る」にわけて語義が載せられている。『広辞苑』では、「替わる・代わる・換わる・変わる」があげられている。以下では漢字は使用しないで「かわる」という仮名表記をする。
 - 2 意味述語BECOMEの前に主語yを設定するのは、対象変化を出現・発生と区別するために、影山(1996)が、金水(1994)の表記を採用したものである。
 - 3 城田(1993: 71)は、道筋を表す「ヲ格」について、ヲをとる名詞は空間的な広がりを持つ場所を示すものに限られると述べている。
 - 4 (18)の構造は、[EVENT] CAUSE [EVENT]という複合構造になっている。このままの構造で連結規則を適用すると、他動詞構造が導かれることになる。ACTとMOVEは同一主体により同時に行われるものであるから、Levin & Rappaport Hovav(1999)が提唱する事象単一化(event coidentification)の操作により、[x ACT-MOVE <PATH>]という単純事象にする操作が適用されると仮定するが、ここでの議論には関係がないので立ち入らないことにする。
 - 5 (28c)(28d)は、変化の後の持続時間という解釈は可能である。この場合には、意味述語BEに時間表現がついていることになる。また、他動詞の(28c)では、「模様替え作業を一時間続けた」という解釈も可能である。この場合には、使役のCAUSEを修飾すると考えられる。使役のCAUSEが継続相を持つことについては影山(1996: 63)を参照のこと。

参考文献

- 影山太郎(1996)『動詞意味論 言語と認知の接点』、くろしお出版。
- 影山太郎(2000)「自他交替の意味的メカニズム」、丸田忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他の交替』、ひつじ書房。
- 影山太郎(2002)「非対格構造の他動詞」、伊藤たかね(編)『文法理論：レキシコンと統語』(シリーズ言語科学1)東京大学出版会、pp.119-145。
- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』、研究社。
- 金水 敏(1994)「連体修飾の『～タ』について」田窪行則(編)『日本語の名詞修飾表現』、くろしお出版、pp.29-65。
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Cambridge, MA, MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1999) "Two types of compositionally derived events," *Proceedings of SALT 9*, Cornell Linguistics Circle publication, pp.199-223.
- 中右 実(1994)『認知意味論の原理』、大修館。
- 城田 俊(1993)「文法格と副詞格」、仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』、くろしお出版。
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』第 巻、くろしお出版。